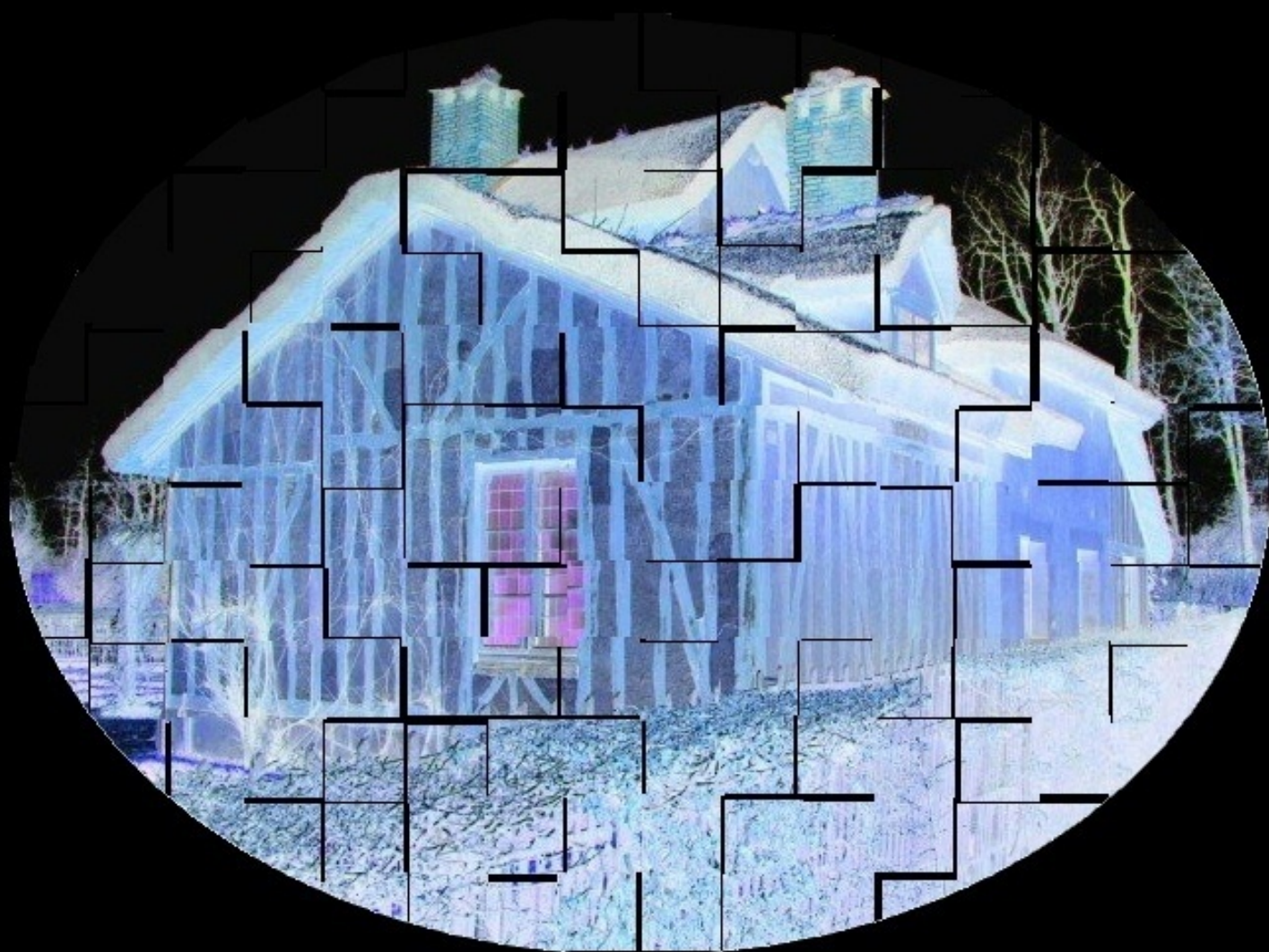


クラインブレーデンの

惨劇



富田満留 著

クライブレードンの惨劇

本編は実話であり、『本当にあった怪奇な世界0・1・II』の番外編である。

ここには悪霊や魔物の類は出てこない。あくまでも、出てくるのはまぎれもない生身の人間。しかし、この話は「お化けや幽霊よりも、生きている人間のほうがよっぽど怖い」ことを証明するれっきとしたホラーである。



クライブレードンの惨劇

ヨアヒム・ブルクハルトには、妻と2人の息子がいた。ヨアヒムは自作農だったが、農場は小さく、家族4人が食べていくのがやっとだった。

そして、1638年、一家はとうとう餓死寸前にまで追い込まれた。飢饉と疫病のために、ほとんど収穫のない年が何年も続いたのである。

農場で飼っていた牛も馬もブタもニワトリもすべて食べ尽くし、最後にはペットの犬まで殺して食べてしまった。これで、食べ物は完全に底をついた。このままでは、死を待つしかない。

ついにヨアヒムは、長年住みなれた農場を捨て、2人の息子アダムとフリッチェンを連れて町へ出て、生計を立てる道を見つけようと決意した。妻はひとまず家に残し、町での生活の目途がたってから、呼び寄せることにした。

クライブレードンの惨劇

こうしてある朝、3人は近くの町リップンに向かって出発した。でも、栄養失調で衰弱していた3人は、日没までにリップンに着くことができなかった。

誰もが飢えていて、ただでさえ物騒だったし、まして知らない土地で夜道を歩くのは危険きわまりないことだった。そこで3人は、近くのクライブレードンという村に向かうことにした。

クライブレードンには、かつてヨアヒムの弟が住んでいた。でも、弟一家は伝染病にかかって死に絶え、生き残ったのは姪ひとりだった。その姪はまだ結婚しておらず、いまま実家で暮らしているはずだった。

荒れ果てて廃墟も同然の弟の家にとどり着いたときには、もう日はとつぷりと暮れていた。

姪との再会は決して喜ばしいものではなかった。彼女は飢えのためにガリガリにやせ細り、衰弱してベッドに伏せていた。そのうえ、まだ独身のはずだったが、生まれて間もない赤ん坊を抱えていた。でも、こんな状態ではお乳が出ないから、赤ん坊もやせこけて、生きているのが不思議なくらいだった。

この3か月の間、姪は草の根やドングリを食べてしのいできたとのことだった。そして、3週間前に赤ん坊を産んだあとは、熱を出して寝込んでしまい、それ以後はほとんど起き上がることさえできなくなってしまったのだった。

この絶望的な惨状を目の当たりにして、ヨアヒムは、これまでどうにか保ってきた理性のたががはずれてしまった。彼ら3人も、何か月もずっと飢えに苦しみ、骨と皮のようになっていた。そして、ついにこのとき、張りつめていた糸が切れるように正気を失ってしまったのだ。

逆上したヨアヒムは、脅しつけるような声で姪に向かって言った。

「いいから、とにかく食べ物を出せ。このまま俺たちが死んでしまってもいいと言うのか！」

「台所の戸棚を見てちょうだい。何も残ってなんかいないわ」

ヨアヒムは空腹でふらつく足で台所へ行き、戸棚を開けた。姪の言った通り、中には食べ物は何一つなく、棚板にはほこりが積もっていた。

これを見た瞬間、彼らは完全に狂気に取り憑かれてしまった。ヨアヒムと息子たちは互いに顔を見合わせてうなずくと、無言でベッドの方へ戻った。

「神に祈れ」

ヨアヒムは、飢えと高熱で動けない姪を見下ろして、冷然と言い放った。

「お前は死んで、俺たちの食料になるんだ」

しばらく、誰も口を聞かなかった。やがて、姪の方から沈黙を破った。

「わたしを食べたいというのなら、どうぞ好きにして。どうせ、じきに飢え死にするだけなんだから。でも、お願いよ、おじさん。子どもには手を出さないで。ああ、どうか、神のお慈悲をたまわりますように」

彼らは神妙に祈りを捧げた。そして、最後に「アーメン」と唱えると、姪はかたく拳を握り、ぎゅっと目をつぶった。同時に、3人はそれぞれ手にしたナイフを彼女の胸に突き立てた。彼女は一声も上げず、絶命した。



3人は、死んだ姪の体を、屠殺した家畜同様に解体した。彼らは、彼女のやせた肉を骨から切り離しながらも、待ちきれずに生のままの肉に食らいついた。やがて解体作業を終えると、火をおこし、肉を焼いて食べた。残った肉は小さな樽に詰めて塩漬けにし、家に持ち帰ることにした。

3人が食べ物を見つけてきたと聞いて、ヨアヒムの妻は大喜びした。彼らは、もちろん、ほんとうのことは言わなかった。ヨアヒムは、どこかの農場から逃げてきたブタを捕まえたのだと、妻には説明した。

久しぶりに食べ物らしい食べ物を見た妻は、この貴重な「豚肉」を煮込むのももどかしく、まだ生煮えの肉を夫や息子たちとともにががつと食べた。

それから4日後、ヨアヒムと、その妻と、長男のアダムが死亡した。病死だった。

クラインブレードンの姪が起き上がれないほど衰弱していたのは、飢えのせいばかりではなく、疫病に冒されていたからだった。その肉を生で食べたために、彼らは姪と同じ病気に感染してしまったのだ。

ただひとり生き残った次男のフリッチェンは、これを天罰だと思い、恐れおののいた。それから数日後、とうとう罪悪感に耐えきれなくなったフリッチェンは、リップンの警察署に出頭し、自分たちが犯した身の毛もよだつような虐殺行為を洗いざらい自供した。フリッチェンはその場で逮捕された。

事件のあったクラインブレードンの家では、肉をそぎ落とされた被害者の無残な遺骨と、赤ん

坊の亡骸が発見された。

ブルクハルトの家では、殺された姪の肉を詰めた樽が発見された。

樽の中身と骨と赤ん坊の亡骸は、教会の墓地に埋葬された。

フリッチェンは、それから数日後、獄中で死亡した――病死だった。

終わり

『本当にあった怪奇な世界Ⅰ』と『本当にあった怪奇な世界Ⅱ』（各130円）もお楽しみください。2巻ともお買い求めいただくと、割引で合計230円となり、お買い得です。

[本当にあった怪奇な世界Ⅰ](#) 目次構成 全10話

そこに誰かがいる

夜中、自分ひとりしかいないはずなのに、どこからかじっと見つめられているような視線を感じる……その正体はいったい？

夢で見た顔

見知らぬ同じ男が何度も夢に現れる……これはいったい何を暗示しているのか？

ケネディはリンカーンの生まれ変わりか？ くり返された**100**年の呪い

暗殺された二人の大統領の不思議な共通点の数々――ケネディはリンカーンの生まれ変わりなのか？

美しき食人鬼

うら若き美女が引き起こした戦慄の猟奇事件。

霊界より愛をこめて

死してなお妻を守りつづける夫の愛のゴーストストーリー。

霊能者レオノール・パイパーの奇跡

数えきれない交霊会を行い、何年間にもわたる調査の結果、科学者たちから本物とお墨付きをもらった奇跡の霊能者。

コナン・ドイルの亡霊

コナン・ドイルの死後に手紙を受け取った男の不思議な体験談。

シェルフォードの幽霊屋敷

霊にとって住みやすい場所というものがあるのだろうか――何度も除霊をくり返した幽霊屋敷。

負傷兵を治したネズミ

外科医が手術をあきらめた負傷兵の傷をネズミが治した？

28年の時空を超えたタイムトラベラー

女性実業家がまだ事業に成功する前の若いころに訪れた街で不思議なタイムトラベルを体験する。

[本当にあった怪奇な世界Ⅱ](#) 目次構成 全10話

列車を止めた超自然の声

過酷な大自然と闘う鉄道員の命をたびたび救った正体不明の声。しかし……

居心地の悪い墓

暴虐の限りを尽くし、教会から破門された男爵は、死後安眠することを許されなかった……

異次元の島

船乗りたちが恐れる奇怪な島。ここに寄港したアルゼンチン海軍の監視船の乗組員は世にも不思議な体験をする。

48時間後の予告された死

人妻をもてあそんで自殺に追いやった貴族の枕元に夜な夜な現れる正体不明の人影……

死体に襲われた医者

フランスの新聞ル・フィガロ紙に載った若き医師の身の毛もよだつ体験。

呪われた家

一家は以前からあこがれていた家に引っ越すことができ大喜びだった。しかし、そこで彼らを待ち受けていたのは……

悪魔祓い

健康優良児の少年が原因不明の発作に襲われ、突然倒れた。主治医の手当ては効果がなく……

予知能力者の苦悩

悲劇を防ごうとする予知能力者。でも、彼女の警告を誰も信じてくれない……

刑務所の赤毛の幽霊

米ルイジアナ州ニューオリンズの新聞各紙が報じた女子刑務所の怪異。

バルバドスの這い回る棺の怪

誰も入れるはずのない封印された地下の納骨堂。その中で人知れず動き回る棺。

クラインブレデンの惨劇

<http://p.booklog.jp/book/93578>

著者：富田満留

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/nysrock/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/93578>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/93578>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ